

高等学校における生徒の記述にみる 歴史的思考力の育成

学籍番号 (209320)

氏名 (遠山 樹)

主指導教員 (水野 恵司)

1. 研究の背景

本研究では高等学校における生徒の記述にみる歴史的思考力の育成を、授業観察や日本史での授業実践を通してどのようなものであるか明らかにしようとした。本研究ではこの歴史的思考力を「過去の社会的事象を理解し、比較・分類・関連づけなどの活動を通して多面的・多角的に捉える力」と定義づける。そしてそれは歴史理解に関する力、因果関係を把握し比較・分類・関連づけ分析する力、時系列を考える力の3つの力に分けることが出来る。歴史というのは学習内容が過去の事象ではあるが、その学習を通して現在および未来を考え、生きる力を養う学習でもある。つまり歴史的思考力を育成することにより現在および未来を生きる力になるということである。

実習校は大阪市立の高等学校で国語科(3年生のみ)と英語科(1・2年生は英語探究科のみ)の2つの専門学科があり、小規模校の利点を活かして少人数授業を行なっている。日本史で歴史的思考力を深める授業を展開し、思考力・表現力を伸ばすことでより生徒が成長していけるのではないかと考え、授業実践において歴史的思考力育成を目標とした。

2. 実習での経験と実践課題研究の進展

基本学校実習I・II、発展課題実習I・IIを通して生徒の活動だけでなく教員の活動なども観察していくことが必要であり、まず実務経験を積むことを目的に実習校に貢献する活動を行なった。期間ごとに前回の反省を意識して実習に臨むことが出来、これは今後にも役立てることが出来ると考える。授業を良いものにしていくためには生徒との関係づくりがきわめて重要であり、学校生活の上で生徒と関わる機会というのは様々あるためそれらも活かして取り組んでいく必要性をこの2年間の実習で痛感した。

3. 授業観察等より

生徒の問題作成と試験問題返却の際の生徒のやり直しを取り上げた。生徒の問題作成では日本史演習の時間で行なわれ、試験問題として使われた10題を分析している。生徒が問題を作成するということはその問題作成者に改めて問いかけられるものになり、生徒自身が問題を作成し、解き合いをするということは歴史的思考力育成に繋がると考える。試験問題やり直しはその解き方について考え説明することにより、歴史的思考力の比較・関連付ける部分を活用することになるといえる。

4. 実践方法とその分析

1年次前期の鎌倉時代「なぜ頼朝は鎌倉に幕府を開いたのだろうか」の授業実践と1年次後期の明治時代「日清戦争と日露戦争の2つの戦争が日本にどんな影響を与えたのだろうか」の授業実践をまず取り上げ、資料の読み取りやそれを活用した生徒の考察について述べ、分析している。資料から読み取れることの記述、学習課題に対する自分自身の考えを記述するという取り組みから歴史理解に関する力、因果関係を把握し比較・分類・関連づけ分析する力、時系列を考える力の3つの力が高まったといえる。

2年次後期の平安時代の授業実践では6回分(①土地制度の復習、②受領と負名、③荘園の発達、④延久の荘園整理令と荘園公領制、⑤地方の反乱と武士の成長、⑥源氏の進出)行なった。そこでは毎回学習課題を取り入れてワークシートの記述をループリック(歴史的事象が理解出来ているか、これまでの学習内容を踏まえた歴史的な見方・考え方が出来ているか、学習課題に関する自分の考えを論理的に記述出来ているか、1時間の学習の成果としてワークシートを自分なりに活用出来ているか)に基づく評価と生徒の自己評価シート(4件法)・自由記述の記入から分析を行なった。ループリックでの評価については出来ているものをB評価とし、その中でもよく出来ているものをA評価、出来ていない・記述が十分でないものをC評価とした。ループリックの歴史的事象が理解出来ているかに関しては違いが現れず、すべての回でほぼ全員にA評価をつけた。その他の観点については①～③・⑤の授業では考える時間を十分に取ったことでループリックでの評価でA評価が7人～9人生徒の自己評価は高いものであったが、④・⑥の授業では考える時間があまり取れず他の実践と比べてA評価の生徒は少なかった。

5 総括

歴史的思考力の育成を研究テーマとして扱い今回は1つの单元内で評価・分析したが、やはり今後も同様の授業を継続して行なって学期・年間・そして2年ないし3年間での歴史的思考力の育成というものを追究していきたいと考えている。

この思考力育成型の授業の1つの課題として時間がかかるというのが実践を通して見えてきたものである。生徒の取り組みや問いの難易度によってかける時間を工夫する必要があり、それらを丁寧にかねすぎると時間が足りなくなってくる。それに関しては教員としての力量の向上やこれまでの積み重ね、生徒の実態に合わせた難易度の問いにするといった対応が考えられる。あるいは説明箇所と考える箇所を完全に分ける、反転授業を導入するといったことも考えられる。いずれにしても考える時間を取らない授業というのはあってはならない。

歴史的思考力を育成するということは資料から考えを導き出すということで生徒の歴史解釈を育てるということである。本研究を通して見えてきたのは、やり方は1つではないということだ。つまり答えが1つではない、どのような方法でも可能であるということだ。それは一朝一夕で身に付くものではなく、継続した取り組みが必要であると本研究から導き出し結論づける。